

四尾連湖における陸水学的研究

— 2010 年度の理化学調査結果から —

吉田 雅彦 風間ふたば¹⁾ 吉澤 一家²⁾

キーワード：四尾連湖、陸水学的調査、理化学調査、2010 年度

はじめに

四尾連湖（海拔高度：880 m、湖岸線長：1.04km、面積：0.058 km²、最大深度：10.9 m、平均深度：6.5 m、35° 31' N, 138° 31' E）は山梨県の五つの自然湖沼の一つで、御坂山地に属する大畠山（標高 1118m）の西南にあり、その成因は陥没湖というのが有力な説¹⁾である。

本湖の湖岸線は非常に単調で東西方向に少し長めの楕円形をしていて、湖の周りほとんど湖岸線近くにまで樹木がせまっている。湖沼型は貧栄養湖に近い中栄養湖である。^{2), 3)}

本湖には流入および流出する河川がないので、湖水量は主として地下からの湧水で維持されていると考えられ、毎年冬季の 1～2 月ごろに全面結氷することが多い。

四尾連湖は 1964 年に山梨県立自然公園に指定されたが、電気もなく徒歩により訪れることしかできない、あまり交通の便の良くない湖であった。そのため、1970 年代前半まではほとんど地元の人以外その存在さえ知られない湖であった。1975 年頃より道路も整備され、訪れる人も多くなり、コイ・フナ・ワカサギなどの良好な釣り場として人気があった。しかし、1991 年頃より⁴⁾始まったとされる密放流によるオオクチバスの生息で、在来の魚種が減少することなどにより、現在では一時の賑わいはなくなりつつある。

四尾連湖に関する陸水学的研究は、1980 年代

までには、田中²⁾や栗谷川ら⁵⁻⁸⁾の研究があるのみであった。

我々は本湖における陸水学的調査を 1994 年から開始し、本年度で 17 年間データを蓄積し得られた知見^{3), 9-33)}は、重要な資料になると考える。

本報告では、四尾連湖定点における定期調査・研究の一環として得られた湖水の理化学的基礎データを、2010 年 4 月から 2011 年 3 月までの期間に限って報告する。

調査方法

調査は 2010 年 4 月から 2010 年 3 月まで、2010 年 6 月と 2011 年 1～2 月の結氷時を除いて、毎月 1 回、湖中央部の定点（湖心）において行った（図 1）。調査項目は、透明度・溶存酸素量・水温・栄養塩類（全窒素量・全リン量）・水中懸濁物量・pH・電気伝導度（導電率）について行った。透

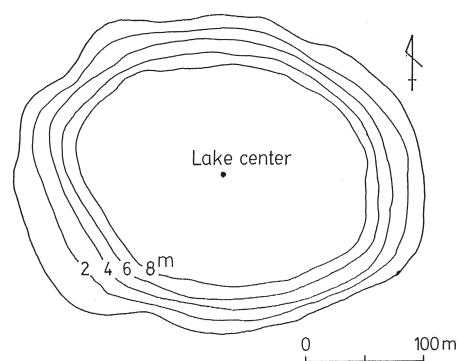


図 1 調査地点概要

（所 属）

1) 山梨大学大学院医学工学総合研究部 工学学域 社会システム系

2) 山梨県衛生環境研究所

明度についてはセッキ円板を用いて測定し、溶存酸素量と水温については1 mおきに測定を行った。湖水試料は、表層（水面から10～20cm）・2 m・6 m・底層（湖底泥から約50cm上層の水）の各層についてバンドン式採水器を用いて採水し、pHと電気伝導度（導電率）はその場で測定した。栄養塩類（全窒素量・全リン量）と水中懸濁物量は、得られた試料を直ちに実験室に持ち帰り、前処理をした後に、-30℃で冷凍保存し、後日まとめて分析を行った。試料の分析は常法³⁴⁾により行った。なお、一部の分析はフローインジェクション法³⁵⁾で行った。

結果

表1に観測時の定点の水深・透明度・水温（WT）・溶存酸素量（DO）の年間測定値を、表2にpH・導電率（EC）・全窒素（TN）量・全リン（TP）量・水中浮遊懸濁物（SS）量・クロロフィルa（chl-a）量の年間測定値を示した。

謝辞

本調査を実施するにあたり、ご協力をいただいた市川三郷町四尾連湖、龍雲荘の皆様に深く感謝いたします。

表1 観測時の定点の水深・透明度・水温（WT）・溶存酸素量（DO）の年間測定値

年月日	2010.4.19		5.17		6		7.12		8.9		9.13	
水深	9.6		9.6		—		9.5		9.4		9.2	
透明度	4.5		6.0		—		7.7		6.0		6.8	
測定水深	WT	DO	WT	DO	WT	DO	WT	DO	WT	DO	WT	DO
0.0	11.0	9.9	16.5	9.8	—	—	23.1	7.6	26.5	7.1	26.8	7.0
1.0	10.4	10.0	15.8	10.0	—	—	23.1	7.6	26.5	7.1	26.8	7.0
2.0	10.2	10.0	15.6	10.2	—	—	23.0	7.6	26.4	7.1	26.7	7.0
3.0	10.0	10.1	15.5	10.2	—	—	23.0	7.5	26.4	7.1	26.7	7.0
4.0	9.8	10.0	15.0	10.4	—	—	23.0	7.6	26.4	7.1	26.7	6.9
5.0	9.4	10.0	13.4	11.2	—	—	22.2	9.0	26.3	7.0	26.6	6.9
6.0	9.1	9.6	12.1	10.3	—	—	19.3	9.4	23.6	8.7	26.6	6.8
7.0	8.6	9.0	11.0	10.7	—	—	17.2	9.5	21.2	7.9	25.8	4.9
8.0	8.4	8.4	10.4	7.9	—	—	16.2	6.9	19.8	4.3	23.7	0.1
9.0	8.4	6.3	10.3	6.8	—	—	16.2	6.6	18.9	0.9	21.6	0.1
9.5	8.5	0.4	10.3	6.7	—	—	15.9	4.9	—	—	—	—

年月日	10.11		11.8		12.13		2011.1		2		3.25	
水深	9.3		9.5		9.7		—		—		9.6	
透明度	4.6		3.5		4.0		—		—		4.6	
測定水深	WT	DO	WT	DO	WT	DO	WT	DO	WT	DO	WT	DO
0.0	19.9	7.3	13.6	7.3	7.7	8.5	—	—	—	—	5.9	10.8
1.0	19.9	7.3	13.5	7.3	7.7	8.5	—	—	—	—	5.9	10.8
2.0	19.9	7.2	13.5	7.3	7.7	8.4	—	—	—	—	5.8	10.8
3.0	19.8	7.2	13.5	7.3	7.7	8.4	—	—	—	—	5.7	10.8
4.0	19.8	7.2	13.4	7.3	7.7	8.4	—	—	—	—	5.7	10.8
5.0	19.8	7.3	13.4	7.3	7.7	8.4	—	—	—	—	5.7	10.7
6.0	19.8	7.2	13.4	7.3	7.7	8.4	—	—	—	—	5.7	10.7
7.0	19.8	7.2	13.4	7.3	7.7	8.4	—	—	—	—	5.7	10.6
8.0	19.8	7.2	13.4	7.3	7.7	8.4	—	—	—	—	5.6	10.4
9.0	19.7	7.2	13.4	7.2	7.7	8.3	—	—	—	—	5.6	9.5
9.5	—	—	—	—	7.8	0.2	—	—	—	—	—	—

単位：水深（m）・透明度（m）・水温（℃）・溶存酸素（mg/l）

表2 pH・導電率(EC)・全窒素(TN)量・全リン(TP)量・水中浮遊懸濁物(SS)量・クロロフィル a (chl-a)量の年間測定値

項目	測定水深	年月日	2010.4.19	5.17	6	7.12	8.9	9.13	10.11	11.8	12.13	2011.1	2	3.25
pH	0		7.8	8.1	—	8.3	8.3	8.0	7.8	8.1	7.9	—	—	8.8
	2		7.8	8.0	—	8.1	8.1	8.0	8.3	7.9	7.0	—	—	8.4
	6		7.9	7.9	—	8.1	8.0	7.9	8.1	8.0	7.0	—	—	8.3
	B		7.8	7.9	—	7.8	7.9	7.5	8.0	8.0	6.9	—	—	8.0
EC (μ S/ cm)	0		39	39	—	38	39	42	44	43	41	—	—	38
	2		38	41	—	39	39	43	46	43	42	—	—	38
	6		39	40	—	41	39	44	44	43	42	—	—	38
	B		39	42	—	60	39	75	44	43	41	—	—	38
TN (mg/l)	0		0.155	0.134	—	0.148	0.135	0.112	0.147	0.150	0.136	—	—	0.175
	2		0.168	0.154	—	0.184	0.130	0.122	0.168	0.158	0.141	—	—	0.191
	6		0.169	0.137	—	0.174	0.126	0.109	0.160	0.140	0.142	—	—	0.197
	B		0.257	0.146	—	0.219	0.133	0.240	0.161	0.114	0.137	—	—	0.262
TP (mg/l)	0		0.002	0.006	—	0.005	0.005	0.004	0.006	0.008	0.007	—	—	0.007
	2		0.028	0.008	—	0.005	0.005	0.005	0.007	0.008	0.008	—	—	0.013
	6		0.015	0.006	—	0.006	0.008	0.005	0.009	0.008	0.007	—	—	0.010
	B		0.011	0.007	—	0.013	0.008	0.016	0.008	0.008	0.008	—	—	0.011
SS (mg/l)	0		1.6	1.0	—	0.6	1.1	0.5	1.6	2.6	2.0	—	—	1.6
	2		2.0	1.8	—	0.9	1.4	0.9	2.2	2.9	2.4	—	—	2.2
	6		2.8	2.0	—	1.1	1.4	1.0	2.6	2.9	2.4	—	—	2.6
	B		3.6	2.6	—	5.0	1.4	5.3	2.3	2.9	2.4	—	—	3.2
chl-a (μ g/l)	0		0.8	1.3	—	1.4	1.4	1.4	2.3	3.2	1.5	—	—	1.6
	2		2.6	2.3	—	1.7	1.2	1.5	2.6	3.0	1.8	—	—	1.4
	6		3.0	2.3	—	1.9	1.8	1.8	6.9	3.4	1.4	—	—	2.5
	B		12.0	2.7	—	3.5	2.1	11.1	3.6	1.8	1.6	—	—	8.4

B：湖底より約 0.5m 上付近

文献

- 1) 田中収 (1987)：山梨県地学ガイド, 108-109, 176, コロナ社
- 2) 田中正明 (1991)：日本湖沼誌, 56, 363-365, 名古屋大学出版会
- 3) 吉田雅彦、吉澤一家、平林公男 (1995)：四尾連湖における陸水学的研究 (予報), 山梨県立女子短期大学紀要, 28, 147-155.
- 4) 高橋一孝 (1999)：富士五湖と四尾連湖の生息魚類の変遷, 山梨県水産技術センター事業報告書, 26, 57-80.
- 5) 栗谷川 晃、麻生行二 (1978)：四尾連湖 (山梨県)におけるプランクトンの生産に関する研究, 昭和 52 年度文部省科学研究費補助金研究報告書
- 6) 栗谷川 晃、麻生行二 (1979)：湖沼の底棲動物についての研究, 昭和 53 年度文部省科学研究費補助金研究報告書
- 7) 栗谷川 晃 (1981)：四尾連湖 (山梨県)における Aphanothece stagnina の分布と推移について, 陸水学雑誌, 42 (3), 180-183.
- 8) 栗谷川 晃 (1981)：山梨県四尾連湖の観光化による底生生物の変化, 水温の研究, 25 (4), 24-27.
- 9) 吉田雅彦、平林公男、吉澤一家 (1998)：河口湖における水位の変動と降水量の関係, 山梨県立女子短期大学紀要, 31, 79-84.
- 10) 荒河 尚、吉田雅彦、平林公男 (1996)：四尾連湖における動物プランクトン群集の季節的変動 (速報), 山梨県立女子短期大学紀要, 29, 103-106.
- 11) 吉田雅彦、平林公男、吉澤一家 (1994)：四尾連湖の陸水学的研究 (予報), 日本陸水学会甲信越支部会報, 20, 45.
- 12) 吉田雅彦、吉澤一家、平林公男 (1995)：四尾連湖の陸水学的研究 (第 2 報) —1994・1995 年調査から, 日本陸水学会甲信越支部会報, 21, 39.
- 13) 吉澤一家、吉田雅彦、平林公男 (1997)：四尾連湖の植物プランクトンの季節変化について, 日本陸水学会甲信越支部会報, 23, 8-9.
- 14) 吉田雅彦、高橋一孝、平林公男 (1998)：四尾連湖の魚類について, 日本陸水学会甲信越支部会報, 24, 20.
- 15) 有泉和紀、荒河 尚、堀内雅人、吉澤一家、吉田雅彦、平林公男 (1998)：四尾連湖の水質変化 (1994. 4

- ～1997. 3), 日本陸水学会甲信越支部会報, 24, 19.
- 16) 風間ふたば、有泉和紀、吉田雅彦、吉澤一家、平林公男 (1998): 河口湖および四尾連湖水の溶存有機物 (予報) —弱塩基性陰イオン交換セルロース吸着画分の経月変動—, 日本陸水学会甲信越支部会報, 24, 17-18.
- 17) 風間ふたば、有泉和紀、吉田雅彦、吉澤一家、平林公男 (1999): 湖水中のDOC濃度の季節変動は何をいみしているのか—河口湖と四尾連湖との比較調査結果から—, 日本陸水学会甲信越支部会報, 25, 9-10.
- 18) 有泉和紀、吉澤一家 (1999): 四尾連湖の水草水平分布, 日本陸水学会甲信越支部会報, 25, 20.
- 19) 風間ふたば、有泉和紀、吉田雅彦、吉澤一家、平林公男 (2000): 河口湖および四尾連湖中の溶存有機物 (続報), 日本陸水学会甲信越支部会報, 26, 22.
- 20) 有泉和紀、吉澤一家 (2000): 四尾連湖の水草水平分布 (続報), 日本陸水学会甲信越支部会報, 26, 24-25.
- 21) 平林公男、吉澤一家、有泉和紀、吉田雅彦、風間ふたば (2002): 山梨県四尾連湖における底生動物群集の季節変化と年変動, 日本陸水学会第67回講演要旨集, 252.
- 22) 風間ふたば、吉澤一家、有泉和紀、吉田雅彦、平林公男 (2002): オオクチバスの繁殖と水質変動—山梨県四尾連湖の場合—, 日本陸水学会第67回講演要旨集, 147.
- 23) 平林公男、荒川尚、吉田雅彦、風間ふたば、吉澤一家、有泉和紀、長澤和也 (2002): 自然湖沼における鰓尾類チョウ (*Argulus japonicus* Thiele) の浮遊個体の動態について—四尾連湖を事例にして (予報)—, 日本陸水学会甲信越支部会報, 28, 5-6.
- 24) 有泉和紀、吉澤一家、荒川尚、風間ふたば、吉田雅彦、平林公男 (2003): 四尾連湖の長期観測結果—透明度、水温、溶存酸素—, 日本陸水学会甲信越支部会報, 29, 69-70.
- 25) 吉澤一家、有泉和紀、荒川尚、風間ふたば、吉田雅彦、平林公男 (2003): 四尾連湖の長期観測結果—植物プランクトン—, 日本陸水学会甲信越支部会報, 29, 71-72.
- 26) 平林公男、荒川尚、吉田雅彦、風間ふたば、吉澤一家、有泉和紀、長澤和也 (2005): 自然湖沼で観察された鰓尾類チョウの浮遊個体, 日本陸水学会第69回講演要旨集, 176.
- 27) 吉田雅彦、風間ふたば (2006): 四尾連湖における陸水学的研究 —2004年度の理化学調査の結果から—, 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 1, 101-104.
- 28) 吉田雅彦、風間ふたば (2007): 四尾連湖における陸水学的研究 —2005年度の理化学調査の結果から—, 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 2, 89-92.
- 29) 吉田雅彦、風間ふたば (2008): 四尾連湖における陸水学的研究 —2006年度の理化学調査の結果から—, 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 3, 57-60.
- 30) 吉田雅彦、風間ふたば、吉澤一家 (2009): 四尾連湖における陸水学的研究 —2007年度の理化学調査の結果から—, 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 4, 47-50.
- 31) 吉田雅彦、風間ふたば、吉澤一家 (2010): 四尾連湖における陸水学的研究 —2008年度の理化学調査の結果から—, 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 5, 35-38.
- 32) 吉田雅彦、風間ふたば、吉澤一家 (2011): 四尾連湖における陸水学的研究 —2009年度の理化学調査の結果から—, 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 6, 57-60.
- 33) 吉田雅彦、風間ふたば、平林公男、吉澤一家、長澤和也 (2011): 自然湖沼で観察された鰓尾類チョウの浮遊個体II, 日本陸水学会第76回講演要旨集, 100.
- 34) 厚生省生活衛生局水道環境部 (1993) 上水試験方法・解説 (1993年度版), 日本水道協会
- 35) 第3回フローインジェクション分析講習会テキスト (1999) 日本分析化学会フローインジェクション分析研究懇談会編

A Limnological Study on Lake Shibire

— A Chemical Study in 2010 —

YOSHIDA Norihiko, KAZAMA Futaba* and YOSHIKAWA Kazuya**

*)Social System Engineering, Division of Engineering, Interdisciplinary Graduate School of Medical and Engineering, University of Yamanashi

**)Yamanashi Institute for Public Health

Key words : Lake Shibire, Limnological Study, Chemical Study, 2010